



プロジェクトセメスター学生達のガーナでの研究活動風景。

2月23日、研修に来ていたプロジェクトセメスターの学生5人が全員日本に帰国してしまいましたが、淋しいと思う間もなく3月は日本からの人物往来が続きます。今月号ではまずそれに伴う野口研での出来事をご紹介します、引き続きウイルス学部で研修を終えた伊藤君から寄せられた、ガーナで体験したサッカーについての記事を、また、前号まで「植物記」を書いてくれた佐々木君からの、気になるカカオのその後についての報告をしてもらいます。さて、チョコレートはうまく出来たのでしょうか？ご期待下さい。

最近の出来事からー 阿部外務大臣政務官の野口研訪問



写真 1

野口研を訪問された阿部俊子外務大臣政務官。
山岡昇司教授と Koram 野口研所長とウイルス学部
P3 実験室前にて撮影。



写真 2

寄生虫病学で阿部政務官にトリパノソーマの説明をする
鈴木高史先生。

去る2月中旬から下旬にかけて、阿部俊子外務大臣政務官がガーナ、ガボン、コンゴ共和国のアフリカ3ヶ国を歴訪され、ここガーナでは2月19日に我々の野口記念医学研究所を訪問されました。Koram 所長との挨拶の後、現在共同研究が行われているウイルス学と寄生虫病学の各研究室を見学され(写真1と2)、種々の微生物が引き起こす様々な病気について大変興味を持たれたようで数々の質問もされました。実は、阿部政務官は衆議院議員(自由民主党)になられる前の御専門が看護学(Ph.D)ということで、本学においてもかつて準教授として教鞭を取



写真 3
阿部政務官一行らと懇談する本学プロセメの学生さん達。

は、丁度本学からウイルス制御学分野の山岡昇司教授らとプロジェクトセメスターの学生さん達 5 名がガーナに滞在していたこともあり、野口研コンファレンス・ホールに場を変え、主に若い学生さんたちと阿部政務官の間での懇談会が持たれました。学生らが今ガーナでどのような研究をしているのか、また日本と気候も風土も大きく異なるガーナ(アフリカ)に到着し、短い期間ながら実際に生活してみた体験からどのような感想を持ったのかなどを一人ずつ発表してもらいました(写真 3)。限られた時間内で手際よく相手にメッセージを伝えるということは、頭で考えるほど易しいことではありません。にも拘らず、皆一人ずつ、ガーナ(アフリカ)について考えたことを、個性豊かに、かつ見事に意見を述べる姿を横から拝見して、改めて本学の学生の優秀さに感心し、とても将来が頼もしいと思いました。最後は阿部政務官から、そうした体験を種々のメディアを通じてどしどし発信してくれることが日本の国際医療協力に対する国民の理解を得られることに繋がるのであるから、是非その姿勢を続けて下さいとの激励の言葉があり、野口研へのご訪問は無事、しかも極めて有意義に終えることが出来たように思えました。最後に関係者全員での集合写真を載せておきます(写真 4)。

(井戸)



写真 4 懇談会の後、関係者全員による集合写真。

最近の出来事から- 故本多憲児先生ご遺族が野口研を訪問



写真 1

3 月の初旬、2 年前東北地方太平洋岸で大震災があつて間もなく 93 才でお亡くなりになった故本多憲児先生の奥様本多道子様とご令嬢の伊奈俊子様ら御遺族のご一行がガーナを訪問されました。故本多憲児先生(写真 1)につきましては、このニュースレターでも再々記事にさせて頂きましたが、元福島県立医科大学の外科教室教授に就任されて間もなくの 1960 年代後半に日本とガーナの医療協力の架け橋に最初に関わられた一番の立役者であり、野口記念医学研究所設立のため文字通り粉骨砕身の努力を厭われなかった同研究所の産みの親と言ってもよい存在の大先生に

なります。故人が生前、もしも自分が灰になったらその一部をこの野口研に埋めて欲しいとの御遺志がありまして、今回の御遺族らのご訪問はこれに基づく由と伺いました。



写真 2 駐ガーナ日本国特命全権 二階尚人大使



写真 3 第 4 代目野口研所長 Francis Nkrumah 教授

その結果、3 月 7 日午前 10 時より野口研究所の中庭のパゴダにおきまして、故本多憲児童先生を偲びつつ御遺灰(一部)を埋葬する式典が、在ガーナ日本大使館、野口研究所、JICA ガーナ事務所などが主体となって厳かに執り行われることになりました。式典はガーナ大学 Elorm Dovie 教授のお祈りに始まり、Kwadwo Koram 野口研所長のご挨拶に引き続いて、ガーナ大学の副学長 Ernest Aryeetey 教授、現在研究所に派遣されている日本人研究者らを代表して不肖私(井戸)、駐ガーナ日本国特命全権大使である二階尚人大使(写真 2)、存命のガーナ人の中では特に本多先生との所縁が深かった第 4 代目野口研所長 Francis Nkrumah 教授のスピーチと続きました(写真 3)。まことに私事で恐縮ですが、私は本多先生が福島県立医大を御退官され、野口研究所との医療協力事業を当初携わった福島県立医大の手

から東大を始めとする全国から選ばれた有数の大学等のメンバーから成る国内委員会に委譲された最初期の頃に専門家として派遣された経歴があり(1984～1985 年に当時東大医科学研究所山内一也教授の推薦により JICA 専門家として派遣)、本多先生ら一行から成る調査団をアクラで迎え入



写真 4 Atentenben

れた経験があります。生前の本多先生のお姿を直に記憶している現ガーナ在住では極めて数少ない日本人の一人でもあり、当時のエピソードをスピーチに加えさせて頂きました。ガーナのお葬式などでは赤と黒色の服を礼装とするのが正式で、式典の途中では縦笛と独特の形をした竖琴を使った音楽によって故人の業績を偲ぶことが習わしになっています(これを現地の言葉では Atentenben と呼びます)(写真 4)。

この Atentenben の後がいよいよ御遺灰の埋葬式で、以前から中庭には本多先生の記念碑が立てられていたのですが、そのすぐ脇に深い穴が掘られ、御遺灰(一部)が納められた箱が大事に安置されました(写真 5)。予定では、故本多先生の奥様でいらっしゃる本多道子様がお出席の手筈だったのですが、あいにく当日急に体調を崩され、御令嬢の伊奈俊子様がお感謝の言葉を代読されました。その代読された文面によりますと、故本多先生は 1968 年に最初にガーナの地を踏まれ、それ以来、お亡くなりになるまで全部で 32 回に亘りこのガーナを訪問されたそ



写真 5 安置された御遺灰

うです。御夫婦でガーナにお出でになられたのは 10 年前だったそうで、再びこの地に降り立たれて感慨無量であることを読まれた下りでは、御令嬢も一瞬言葉に詰まり、列席する一同の涙を誘う場面もありました。今日にあって、野口研において研究している私たちは、改めて故人の残された偉大な足跡に感銘し、心を新たにその御意志に報いなければならないと硬く決心した瞬間でもありました。謹んで故本多先生の御冥福をお祈り申し上げます。(井戸)

ガーナ報告ーサッカー体験記

試合終了後、みんなで手をつないで輪になる。そして祈る。

この瞬間は私にとって特別な瞬間だった。ガーナでたくさんの貴重な経験をさせていただいたが、これほどはればれとした気持ちになったことはない。以前よりテレビでアフリカのサッカーチームが試合前や試合後にメンバーで手をつなぎ輪を作って祈っている様子を見ることが多かったが、それを見る度、何をしているのだろうかと思問に思っていた。しかし、私はその瞬間に立ち会うことができた。今回は研究を離れて、サッカーについて書かせていただきます。



出場した試合終了後 OBONU サッカーチームの選手達と

ガーナに来たらやりたいこととして、研究や病院見学、フーフーを食べることの他に、サッカーがあった。私は現在フットサル部の主将で、サッカーは観るのもプレーするのも大好きである。ガーナは言わずと知れたサッカー強豪国であり、ガーナ代表“ブラックスターズ”はアフリカネーションズカップにおいて 4 度の優勝を誇る。南アフリカ共和国で開催された 2010 年 FIFA ワールドカップでは、A.Gyan の活躍もありアフリカ勢で唯一グループリーグを突破し、ベスト 8 まで進出した。初めてアフリカ大陸で開かれた FIFA ワールドカップで、アフリカのチームの中で勝ち残ったのがガーナだけであったため、アフリカの唯一の希望として取り上げられていたのが記憶に新しいかと思う。

ガーナ人はサッカーが大好きであり、いたるところでサッカーをやっている。寮の駐車場も夜はミニサッカーコートと化した。さらに車で移動中、小学校を見つけると必ずと言っていいほど、二本の木を立てただけのゴールに向かい子供たちがサッカーをしているのが見受けられた。日本人補習校でも放課後は小学生たちがボールを追いかけていた。また、寮のテレビは夜になると、ヨーロッパサッカーの試合が流れ、ベンチに座って見ているガーナ人が必ずいた。

滞在中、ちょうどアフリカネーションズカップが開かれており、ガーナはその話題で持ちきりだった。ドライバーやリサーチアシスタントとの次の日の会話は、まず昨日は勝ったねといった言葉から始まった。ガーナはグループリーグを突破し、準決勝まで駒を進めた。準決勝の相手はブルキナファソ、ガーナの北部に隣接する国で、FIFA ワールドカップへの出場はまだ果たせていない。準決勝当日、寮のテレビの前は大混乱となった。寮の入り口にテレビが置いてあるのだが、他の寮や寮と関係ない学生ががたくさん押し寄せ、寮のおばさんは多くの人の乱入を整理をするのに必死であった。まるで昭和の日本における街頭テレビに集う人々といった様である。50

人はいるのではないかというガーナ人、私と釘宮君は試合に熱狂した。寮の部屋からも歓声がとんでくる。どちらが試合を支配するわけでもなく互角といった戦い。ガーナが攻めてシュートを放つと興奮して叫び、攻められシュートを打たれると悲鳴が聞こえる。本当に純粋な人たちなのだと感じた。ブーイングなどは絶対にしない。(音量を上げようとして間違えてチャンネルを変えてしまった寮のおばさんに対してはブーイングが起こったが、チャンネルが戻ると歓声を浴びせていた。) 大量の人が暑い中ひしめき合っているせいか、他の人の汗がとんでくる。ガーナは敵のファールで得た PK を Wakaso がしっかりと決め先制する。しかし、ブルキナファソの Bance に決められ追いつかれてしまい、延長戦へと突入、それでも決まらず勝負の行方は PK 戦へ。みんな祈るようにテレビを見つめる。残念ながらガーナは失敗が続き敗れてしまう。敗れてしまったが、ガーナは今回まだ若いチームなので、必ずや 2014 年 FIFA ワールドカップに出場し活躍すると思う。

私はラボワークを終えてから、寮の近くにある大学内の空き地で、学生の草サッカーに入れてもらっていた。見てみると「Come in! Come in!」と誘ってくれ、それ以後、都合が合えば参加していた。みんなサッカーが好きで上手くて、下手な人がいない。サンダルでやっている人も裸足でやっている人もいるが、それでも遜色ないのが驚きだ。私はスニーカーでやっていたので滑りやすく、「You should buy football shoes.」と言われる



寮の近くの即製サッカー場

始末。さらにガーナ人はバランス能力が高いと感じた。ぼこぼこの土地で、空気の抜けたやわらかいボールを、激しい体の接触の中コントロールするのは至難の技で、そのような状況でも決してこけることなく、きちんとボールを止めて蹴ることができるのは驚愕であった。しばらく参加していると、通りかかると誘ってくれるようになった。あるときは、「夕食に呼ばれていて 15 分だけしかできない。」と言っても、「It's OK. Play! Play! Come in!」と言うので、サッカーをして汗だくになって、夕食へ向かうということもあった。サッカーシューズを買えと言われた私は、帰国まであと 1 週間といった時期にようやくトレーニングシューズを手に入れることができた。露店にて明らかに中古品だろうというものを 25cedi(1,500 円弱)で購入した。期待通り使ったその日に破れてきた。



試合風景

志村さんの紹介で、サッカーチームのコーチを務めるベンさんに Division 3(日本でいう JFL にあたると思われるリーグ)のサッカーの試合を見せてもらうことができ、さらに別の機会にベンさんのチームの試合に出場させていただきました。でこぼこの広い空き地にて行われていた練習試合は、大学生などで構成されたチーム同士で行われており、観客も少々見受けられた。両チーム逼迫した戦いで、スコアレスドローで後半を迎えた。私は他のメンバーに教えてもらいながらウォーミングアップを行い、いつでも試合に出られることをさりげなくアピールした。内心、これは場違いだとは十分承知していたが、やっぱり試合には出てみたかった。そしていよいよ私が呼ばれた。右サイドバック

での出場。お辞儀をして全力で駆けていった。観客の少年たちからは「Kagawa.」と言われたが、香川選手には足元にも及びません。まずはマークの仕方を確認しようと思って、センターバックや右サイドハーフの選手に、

誰をマークするかなどのコミュニケーションをとった。サッカーをやるのは久しぶりだったこともあり緊張していたが、試合に入るとガーナ人と一緒にチームとして攻撃する、守備するというのが楽しくて仕方なく、本当に幸せな時間であった。試合中、相手のフォワードに「You're a good striker. You play very well.」と適当に声をかけると、「Really do you think so?」と返された。いくつか危ない場面もあったが、敵の攻撃は防ぎきり、失点はなかった。隙あれば、「Right side!」と叫んで右サイドにボールを回すよう要求した。後から「なんかしゃべっていたねえ。」と反対サイドで観てくださっていた志村さんに言われる始末であった。試合後、相手選手と「Good play!」と言って称え合った。今度来るときは英語だけじゃなく、チュイ語などの現地語も学んでくるようにと相手選手に言われた。実際にチームの監督は試合中なにやらずと怒鳴っており全く聞きとれなかったので、選手に聞いたところ、ガー語を話していたと分かった。

試合終了後、みんなで手をつないで輪になった。1人の選手が祈り始めた。何を言っていたのか後で聞いたところ、「試合に勝ったこと、引き分けたこと、または負けたことを感謝、ケガをせずに終わったことを感謝する。」という答えが返ってきた。私はそれほどまでに奥ゆかしい文化とは想像しておらず、「勝つぞ!」などと円陣を組んでいる自分たち日本人が恥ずかしくなると共に、心が温かくなった。祈りは試合前も行われ、日本での“いただきます”と“ごちそうさま”の文化に近いのではないかと思った。私はチームの一員としてそのような神聖な文化に加わることができ嬉しかった。

私がガーナ滞在において本来目的としていたことは医療関連の事象であることは間違いないが、ガーナ人を理解するのにサッカーは必須なのではないかと考える。ガーナ人が愛するものを愛することができれば、仲間として認めてくれやすいのではなかろうか。1つのボールを通して交流ができ、子供たちに笑顔や希望をもたらすスポーツのすばらしさを感じると共に、私のような見ず知らずの外国人をサッカーの輪に常に歓迎してくれたガーナ人の心の広さ、温かさに感動する日々であった。(ウイルス学部 伊藤佳史)

佐々木君の植物記 IVー カカオ(Cacao)のその後

帰国しましたが佐々木です。なぜか日本でガーナニュースレターを書いています。カカオはどうなったんだ!という話があったので、カカオ豆のその後について書きたいと思います。



カカオ豆を発酵、洗浄、乾燥させるところまではガーナでやっていたので、日本ではまず焙煎しました。本当は110度くらいがちょうどよいようでコーヒー豆を焙煎する機械などがあればいいのですが、家にはないのでフライパンで適当に熱しました。この過程で豆に含まれる酢酸が飛んで、カカオ豆らしい香りがでてきます。油もでてきていい感じですよ。



次にこれを軽く砕いて、胚芽をとりのぞきます。この段階でカカオニブと呼ばれる状態になります。これをできるだけ細かい粉末にしていけます。ここでも本当はコーヒーミルとかがあればいいのですが、湯煎をしながらゴマをするようにすり鉢でゴリゴリとやりました。



しかし、いつまでたっても目標とするペースト状にはならず、一旦すり鉢は断念。Bamixという文明の利器に手伝ってもらうことにしました。

これでかなり細かな粉末になったので、もう一度湯煎しながらすり鉢ですりました。ここまででカカオマス、液状ならカカオリカーと呼ばれます。



なんとなくベタつとしてきたので、諦め半分、ここで上白糖とスキムミルクを加えてみます。チョコレートをつくる時には本当は脂肪分を増やすために、カカオマスから抽出したカカオバターを加えるらしいですが、そんなものはないのでそのまま。

混ぜても混ぜても粉っぽいままでどうしてもチョコレートのようににはなりませんでした…。やっぱり粉末をもっと細かくして、カカオバターを加えないとダメなのでしょうか。



この粉をどうしたものか、と悩んで調べていたら、どうやらこの粉をお湯で溶いてトウガラシのような香辛料や蜂蜜、コーンミールなどを加えたものをアステカの王は飲んでいらしいです。さすがに香辛料などをいれるのはためらわれるので、ヨーロッパに最初にチョコレートが導入されたころの飲み物、ショコラテを目指してみることにしました。ショコラテはカカオマスに砂糖や粉乳を加えて、お湯や温めた牛乳で溶いたものようです。これならできると思い、試してみると…



どうしても溶けない…。コーヒーの粉を直接牛乳にいたみたいですが。味はたしかにチョコレートの味がするのですが、カカオの粒をざらざらと感じて飲み物なのか食べ物なのかよくわかりません。なんでもこのお湯に溶けにくいカカオの粉を溶けやすいように脂肪分を取り除いてココアを完成させたのが、かの有名なバンホーテンだそうです。偉大ですね。(寄生虫学部 佐々木暁洋)

編集後記

冒頭にも書きましたようにプロセメで研修に来ていた 5 人が一斉に日本に帰ってしまったため、拠点も急に淋しくなりました。毎年、彼らが滞在する数ヶ月間は拠点スタッフにとってもガーナ人研究者にとっても特別な時間になりつつあるようです。滞在した研修生達にも大きな意味のある一瞬だったことと思います。次号より研修生の滞在記をご紹介します予定であります。どうぞお楽しみに。

制作：志村 文責：井戸、鈴木

ご意見ご要望などの送り先：shimura.kyoten@gmail.com
